

完了報告書（平成 23 年度）

提出者 _____

提出年月日 _____

【プロジェクト名】

和文 戦後日本農村における国家の介入と農家生活の変容に関する研究—生活改善普及事業と農業機械化の検討を通じて—

英文 Change in Farmers' Life by State Intervention in Post-war Japan

: The Analysis of Cooperative Extension Work and Agricultural Mechanization

【メンバー構成】

研究代表者 岩島史

幹事 同上

メンバー 芦田裕介

【ねらいと目的】（600 字程度）

戦後日本農村の変動過程においては、国家という公共圏からの介入により、農家生活という親密圏の場のあり様が著しく変容した。本企画では、農村社会が急激な変貌を遂げた戦後復興期から高度経済成長を経た 1970 年代までを中心に、農家の「生産」（農業機械化）と「再生産」（生活改善普及事業）の両面から、その変容を実証的に明らかにする。

生活改善普及事業は、特に「嫁」の立場の女性達のエンパワーメントに大きな効果を上げたとされている。しかし申請者のこれまでの研究で、「生活の改善」というロジックが農政の国家的な課題解決のために用いられた側面もあったことが明らかになっている。本企画では、地域の女性達がそのような介入をどう受け止めたのか、分析する。

農業機械化は、農業経営の合理化をめざす農政の農業近代化政策と農業機械メーカーの関与のもとで急速に進行し、農作業の省力化・効率化に伴い農家の家族関係も大きく変化した。本企画では、機械化の先進地域である岡山県南部の農村でのフィールドワークから、労働を通じた農家側の家族関係の変容に重点を置き、ジェンダーの視点を加えた分析を行う。

【活動の記録】

岩島は 2011 年 8 月に長野県伊那市・駒ヶ根市で生活改善グループに所属していた農家女性 20 人と生活改良普及員 2 名にききとりを行った。また、2011 年 11 月には伊那市高遠において母親文庫の文集や婦人会の文集などの収集を行った。

芦田は、2011 年 6 月～2012 年 2 月にかけて、岡山県岡山市興除地域において、地域の農業の変化を記した文書資料の収集と、農家の世帯主と可能であればその配偶者に対して、機械化に伴う農業労働の変化に関する聞き取り調査を行った。

【成果の概要】（800 字程度）

生活改善（岩島）

再生産領域への国家の介入は、第二次世界大戦後、占領期を画期としてすすめられた。農村においてもっとも重要な位置を占めるのは農林省が 1948 年に開始した生活改善普及事業である。本研究では、生活改善普及事業の対象であった農村女性たちにとって、同事業の何がどのような意義をもったのか、国家による「生活改善」が女性の動員と親和性を持つことに留意しながら考察した。その結果、生活改善グループの結成は地域の要請によって一斉に行われたが、参加の可否は「家」の事情に左右されること、表面的には普及事業の意図にそっているように見える参加も、「生活改善」そのものへの関心は弱いことが明らかになった。

農業機械化（芦田）

調査データの分析から、明らかになったのは以下の 3 点である。第一に、兼業農家でも専業農家と似たような農業労働の編成原理を確認できたが、兼業農家の女性は農業労働から離脱しやすい傾向がある。第 2 に、技術とジェンダー関係の問題、とくに農業労働に不可欠である農業機械とそれを中心とした農作業体系において、女性はスキル獲得機会が乏しく、男性が機械操作を担いやすい。第 3 に、農業機械化は、周囲の景観との関係も含めて農業機械と男性性が結びつくことで、農業労働における男性性中心主義を強化したことが明らかになった。

また、日本では農業労働におけるジェンダーの問題に関する研究がまだ少ないため、新たな研究の視角や方法を提示することにもつながったといえる。

本企画では、生活改善と農業機械化が国家による農家生活への介入であるという視点から、農家生活を生産と再生産の両面から把握・分析することによって、介入の結果としての農家生活におけるジェンダー編成の歴史的な過程の一端を明らかにした。

【通信欄】

（研究代表者記入）

プロジェクト	<input type="checkbox"/> 次世代	<input type="checkbox"/> 次世代ユニット	<input type="checkbox"/> 男女共同参画に資する調査研究
経費	予算額	(千円)	実績額